



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京大学医学部卒業後、大阪第二医科大学内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

モノクロの東京の街を背景に、林檎を振り投げる手と手。そこに流れるのは、サザンオールスターズの『いとしのエリ』。『ふぞろいの林檎たち』が始まったのは1983年のこと。架空の四流大学を舞台に、恋愛も就職もうまくいかない若者達を描いたこのドラマに、いつしか自分を重ね合わせていました。

この作品を始め、『岸辺のアルバム』や『高校教師』など数々の名作ドラマを手掛けた名プロデューサーで演出家の鴨下信一さんが、2月10日に都内の病院で亡くなりました。享年85。死因は肺炎との発表です。

肺炎は、平成28年まで、日本人の死因の第3位でした(1位はがん、2位は心臓疾患)。ところが現在、3位が老衰で、4

193 演出家 鴨下信一



位が脳血管疾患。肺炎は5位までランクダウン。肺炎が減っているのか? いいえ、そうではありません。実は平成29年から厚生労働省は「肺炎」と「誤嚥性肺炎」を区別して死因調査をするようになったのです。このため、一見すると「肺炎」で死んだ人が減ったように見えるのです。また、誤嚥性肺炎があつて

「では老衰でお願いします」と仰るご家族が最近増えました。死因の記載というのは、状況によって幅があるものです。がんを患っておられても、直接の死因が肺炎であれば、肺炎と書

「ふぞろいの林檎たち」など手掛けた名作ドラマ多数

「不公平」という言葉が浮かぶそうです。生死を分けたことも不公平。戦争で儲けた人、人生台無しになった人、生き残った者の罪悪感も含め、不公平だったと。そんな時代を繰り返さぬよう、「ふぞろい」世代の僕達には、一体何ができるでしょうか。

も、「老衰」と死亡診断書に書く医師がようやく増えてきたという背景もあるのでしょうか。高齢になればなるほど誤嚥性肺炎の割合は増えます。70歳以上の肺炎の7割が誤嚥性というデータもあります。つまり、誤嚥性肺炎とは長寿の証。僕も、「死亡診断書は肺炎と書きますか? それとも老衰にしますか?」とご家族に訊くことも。

「知らんがな」の世界でしょう。鴨下さんの著書『誰も「戦後」を覚えていない』(文春新書)を読みました。お父上はシベリア抑留者であり、ご本人も戦後の混乱を生きられた。鴨下さんがあの時代を思い出す時、「不公平」という言葉が浮かぶそうです。生死を分けたことも不公平。戦争で儲けた人、人生台無しになった人、生き残った者の罪悪感も含め、不公平だったと。そんな時代を繰り返さぬよう、「ふぞろい」世代の僕達には、一体何ができるでしょうか。

教訓にしたい「戦後は不公平」との言葉